# 鹽田家系

單

H20
484

鹽田良臭の父揚庵は出羽山形に生れ、十五六歳の時、江戸に
出で、本郷（菊坂）の長泉寺の住職が同郷人（七間）であつたところから、
[redacted]らく同寺に寄居した。父は小林玄端と、
之をたよりて
ひ、揚庵は当時（醫）小林玄瑞といつた。玄瑞は長泉寺の住職に
向つて、名医の門に入り度旨を述べしに、住職云ふ。「此の近
傍に伊沢辞安といふ医者が居て、是老に其の病あてである。
此の人は屈指の大家なれば、[redacted]（那処）に弟子入をしたら宜
しからん」と。玄瑞は遂に蘭軒の門に入つた。成業の後、伊沢
氏の勧めに従つて清川玄道を仮親として、名医塩田秀（シウ）

鹽田家本
東京帝國大學圖書印
B 23475

三(サン)の養子となり、祖父養父秀三の名を冒して塩田楊庵と改めた。

塩田氏は別紙にも記すが如く、父秀三の時、諸大名に出入して合計七十二人扶持を受領し、秋田〔三春藩主〕の家来分となり〔佐竹を除くの外皆〕居られた。楊庵の代になつても、是れ等の扶持は継続した。但し楊庵は三春の人であるから、又秋田氏の縁は切れたが、〔先代の通り〕宗對馬守に召されて若き時より其の侍医となり、二百八十石を領した。且つ松平伊豆守家の縁故に依り、津軽家へ新規に出入となつた。其の所以を考ふるに、津軽順承侯は毎夜下痢せられるので難

〔順承侯は元来小津軽出られで、一旦豆州へ縁を結ひて後、宗家なる津軽の養子となつて〕

の外心配し、多紀、辻元〔為春院〕諸名医を聘して治療を受けられたが、兎角効験を奏さなんだ。依て吉田侯〔伊豆守〕の勧に従て楊庵を招き治療を請はれた。楊庵云く。「是れは宗對州家方の牛肉丸を服用遊されて然るべし。」此の薬は普通には大棗を用ゐれど、本来は牛肉を用ゐるものである。法剤の下痢病気は慢性であれば、半年も御用ゐ遊ばされたならば本腹致しませう。」牛肉丸は朝鮮牛肉を乾燥せしめたものを酒で解きて製したものである。津軽侯は之を服用されると、四ヶ月目で下痢は止まつた。侯は大に喜ばれ、特に此

〔保は生れたばかりの小児の時、良三の末弟の乳兄弟となり、且つ毎日良三の牛肉丸で育てられた。塩田と濃る縁故その〕

の薬を十四五年間飲み通された。そして揚屋さんへは出入扶持、十五人扶持を賜はつた。

文久慶応の頃、松平信古さん（伊豆守さん、維新後は大河内信古）は登城の帰途、道具類をはづして、（道具は屋敷へかへして）家移つて揚屋の奥へ遊びに来られ、津軽順承侯も三本道具と供廻りとを屋敷へかへして塩田の奥に半日位づつ遊ばれた。篤範は塩田の奥の篤範部屋へ預つた。

又令息令嬢等を遊びによこされるので、其の時には庭で大神楽や、角兵衛獅子をあはせた。



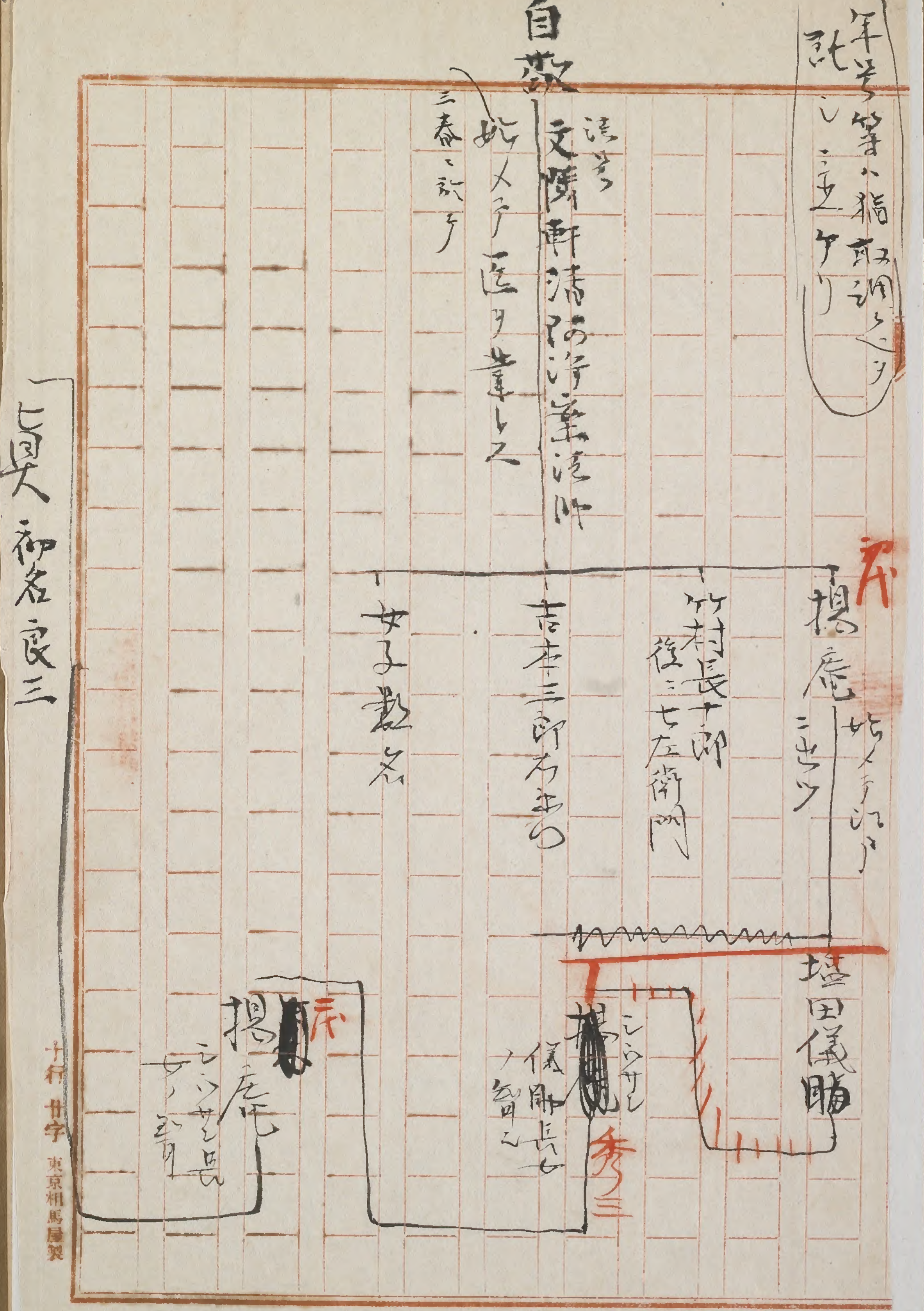
松平信古さんは画を巧にかゝれた。維新少し前、家来の同勢を召連れず僅かに近習の者を従へて、実父塩田を訪はれた。揚屋は遽かに手紙を諸方へ飛ばせ、小野湖山、大沼枕山、佐竹永湖、目賀田介庵等十人許を招きて、俄かに書画会を宴ひらいてやつた。湖山は揚屋の地面内に住居して居たから、近くて招くにも便利であつた。そんな風で、いつも会の夜十時頃まで遊んでいかれた。○合作の狂画がある。それは三人で画いたもので、一人は信古侯、一人は芸妓、今一人と相向きあつて居る滑稽の人物は即ち揚屋である。

良三は揖斐の倅として勢州家の侍医となり、二人の婦人に仕へた。一人は今の宗星石さんの嚴父重正侯の嫡母で女隠居。今一人は重正侯の母。一旦木場の石川家へ嫁して離縁となつてたゞみ娘婦とは婦人であつた。良三は此の兩女の御附きとなつて勤料十五人扶持を領して居た。

コノ項ハ年月サヨリ委シク記シテ下サイ 探シテ上ヘ

○

往年外務大臣から支那又は獨逸等の公使を勤めた鹽田三郎といふ人があつた。父は塩田文庵とて幕府時代に淺草福井町に住し、醫を業とした。文庵は大槻盤水、高野長英等と共に医界、政界に力を尽した人である。○先年鹽田奥が(太政官)内閣又は農商務省等に大書記官となり、博覧会(の事)等に関係し居りし頃、屢々三郎に面会したものだ。若しや兄弟の家と僕の家とは何かの關係がありはせぬかと話し合つたが、果して同じ祖先から出て居るのが発見された。塩田奥の先祖は塩田陸奥守平惟寛(と出づれ)とて平家に事へた常盛






す。其の子揚庵始めて江戸に出で、本石町鐘撞堂の下に門戸を開き、後発展して神田お玉ヶ池（東松下町辺）に移る。即ち明治年間まで引つゞきて子孫の住居しゝ家也。自敬の次子は幕府の火の番竹村氏の養子と為りて竹村長十郎と称し、後「長」の字に差支ありて七左衛門と改む。阿部伊勢守正弘が閣老たりし時、此の人奥右筆組頭と為りて頗る勢力ありしが、七十六歳の時江戸城に在りて執務中脳充血の為めに頓死す。伊勢守命じて邸まで駕籠を入れさせ、厚く介抱して帰宅せしむ。此の人は外国のことにも明

の臣下ではありし。（三郎の先祖は惟賢の弟ではある）八島の戦
に敗れてより、惟賢は宗盛の子（当時二歳）を抱きて奥州に
逃れ、惟賢の弟は九州に逃れたり。九州へ逃れて後、或は漂泊
塩に土着し塩田村を開けり。後遂に塩田驛にありつれ。（一）又
惟賢は奥州三春附近に落ち着き、赤塩田村を開けり。
其の後数代今の本家の十代程前より三春に移れり。尤も塩
田村に末世の墳墓は残れど、旧き代々の墳墓は見當らず、
但し三春に在る分は悉皆現存せり。◯後世文隣軒清浄
法師で（法号）は、俗名自敬なる者三春に於て始めて医を業と



す。其の子揚庵始めて江戸に出で、本石町鐘撞堂の下に門
戸を開き、後発展して神田お玉ヶ池（東松下町）に移る。即ち
明治年間まで引つゞきて子孫の住居しゝ家也。自敬の
次子は幕府の火の番竹村氏の養子と為りて竹村長十郎
と称し、後「長」の字に差支ありて七左衛門と改む。阿部伊勢
守正弘が閣老たりし時、此の人奥右筆組頭と為りて頗
る勢力ありしが、七十六歳の時、江戸城に在りて勤務中脳
充血の為めに頓死す。伊勢守命じて廊下まで駕籠を入れ
させ、厚く介抱して帰宅せしむ。此の人は外国のことにも明

如く、随つて著名であつた。其の弟（即ち自家の第三子）は亦幕臣内藤氏に養子となりて吉本三郎右衛門と称す。大川香の家払ひ、西丸御定番と火消取締とを兼ねたり。此上三[redacted]子の外、数名の女子があつた。

揚庵の子儀助は、医師を嫌つたので、与力の株を買ひ与へ、[illegible]子は逝きしぬ。[illegible]二十二三歳にて早世し、子

○塩田秀三は三春の大工佐藤某の子、幼時より文隣軒に就て学び、成長の後、文隣軒の子揚庵と共に江戸に医業を究め、居るに及んで、これをたよりて出府し、初め碑水と号し、後、樺水と改めたるは何なりし。碑水は、小石川に居住し、生れて、樺水と書くは何故あるやを詳にせず。

を好み、十五六歳の時、江戸に出て、暫らく小石川に寓居し、大田錦城の門に遊んだが、遂に一医となつて揚庵の門に入り、揚庵の養子となつた。

揚庵に[redacted]随って漢業を好み、医業の傍、常に之に親しみ、秀三が四十六歳の時、揚庵は深川黒江町に隠宅を構へて甚だに移り、妻は是より先き既に死去したれば、下婢一人を使用[redacted]し、且つ舟子（せんどう）を漁夫とともに召抱へ、手舟を備へ、雨天にあらざる限りは日々深川に出て、且つ釣り、且つ網を投じ、頗る巧手であつたから、深川の入道と云ひ、漁夫仲間に誰

加工、頗る著名であつたといふ。其の弟（即ち自家の第三子）は亦幕臣の養子となりて吉本三郎左衛門と称す。大広書の家構え。西丸広定番と火消取締とを兼ねたり。○以上三[redacted]子の外、数名の女子があつた。
揚庵の子儀助は、医師を嫌つた由で、与力の株を買ひ与へ、四ツ谷五十騎町に住居した。併し二十二三歳で早世し、子なくして家は絶えた。
揚庵は、長女郷（きやう）に聟を迎へて跡を継がせた。此の聟は、即ち有名なる鹽田壽三（じゆさん）である。此の人は三春の大工の悴で学



を好み、十五六歳の時、江戸に出て、暫らく小石川に寓居し、大田錦城の門に遊んだが、遂に医となつて揚庵の門に入り、揚庵の養子となつた。
揚庵は、[redacted]頗る漢学を好み、医業の傍、常に之に親しみ、壽三が四十六歳の時、揚庵は深川黒江町に隠宅を構へて其処に転り、妻は是より先き既に死去したれば、下婢一人を[redacted]使用し、且つ舟子（せんどう）と漁夫とを召抱へ、手舟を備へて雨天ならざる限りは日々深川に出て、且つ釣り、且つ網を投じ、頗る巧手であつたから「深川の入道」といへば、漁夫仲間で誰

れ知らぬ者無く、「海坊主」の渾名を受け、みづから「烟波釣徒」と称した。天候を観るに上手であつたので、漁夫等は「海坊主」が海へ舟を乗出すと否とに依つて天気の良否を定めたと云ふ。揚庵又軍学に精しく、極先きへ浅き「流し」を作りて砂を盛り、甲越流の軍法を教授し、又具足師を招き、みづから指揮して甲冑を作らせた。前立てには華織無地の茶蒲菓、黒繻にて小さわを拵へ、青糸綵縫の（甲冑）よしたが、此の揚庵は館稼の大男であつたと見えて、甚しき秀三郎は大きを過ぎて迚も着用せられなんだ。それ



てゐるが、其の父揚庵（二十四貫八百匁）が着てさへも、丈がへしてゐたといふ。此の揚庵は七十三歳で死んだ。秀三は揚庵の隠居後二年目に膝が抜けた。而かも諸大名へ出入し、國は安政年間、此の父揚庵の時代まで、大男の医者として紀州、尾州、佐竹等皆表門から玄関へ駕籠を揚庵は青木春泰と坂上玄丈とにて三傑横づけにし、駕籠脇へ門弟一人附添つて居た。さて玄関へ着くと、家臣（その大名の）が蒲団を携へ来り、其の駕籠を卸す上へ秀三を載せて運んだものであつた。そして扶持を呉れた大名は、佐竹、秋元但馬守、永井主膳正、摂州牧野、松平伊豆守、黒田甲斐守。上総久留里の藩主にて、此の成道子在り、小黒田と称す等にて総計七十二人扶持であつた。是れより先き、先代の時、名字帯刀

○

田村右京太夫の家来分たりつるに、秀三の時に、故ありて秋田（三春藩主）の家来分となりつるを。併し扶持は、其儘になん。扶持も前より多く貰つるのに、宗對馬守よりも、是れは十五人扶持であつた。

良主の父揚庵は、至つてソヽツカしい人であつた。元来肥満症であるより、大小を佩るることを甚苦痛に感じ、麻布廻りあたり、多くは只一刀を佩びて出掛けるので、藩（宗對馬守）から度々注意をされた。或る時藩侯に奥方の里



方ある藝州侯を訪問された時、君侯より「己れに代つて」と、非常に立派な拵の揚庵も兩侍と脇差を取らせ、草履取を從へ、駕十徳で駕籠に乗つて随行した。さて先方で鄭重なる待遇を受け、君侯に從つて暇を告げて帰つた迄はよかつたが、ツイ刀を忘れて置き去りにした。翌日藝州邸から對州邸へ人をもつて返し越した。對州邸では、大に驚き、誰れが大小を忘れしなど、種々論議の末、揚庵だといふ事が分かり、宅へ届けて来れた。揚庵は一方ならず恐縮したさうだ。○又或る時、多紀藍庭と或る酒楼に登つたが、代の

時も大小を置き去りまして帰られたとしても想ひ起さずに居る。翌日炎紀から刀を紙に包み、手紙を添へて送つて来た。其の手紙の文書に「刀の出物あり。至て廉ナ品なり」とあれど、つくりが一寸面白きゆゑ、若し思召に叶ひ哉、兎に角御覧に入れる」とのこと。「ドンナ刀で有らふ」と揚庵に好奇心に駆られて包を解いて見ると、コハソモ如何に、昨夜自分が置き忘れて来た刀であつたぞ。